



ゲート SEASON2

自衛隊 彼の海にて、斯く戦えり

2. 謀濤編〈上〉

α L P H α L I G H T

柳内たくみ

Takumi Yanai



アルファライト文庫



Main Characters 主な登場人物



シャムロック・ハ・エリクシール

ティナエ政府
最高意思決定機関
『十人委員会』のメンバー。



ケミィ

海で暮らす
アクアス族の女性。
人魚のような特徴を持つ。



徳島 甫
とくしま はじめ

海上自衛隊二等海曹。
特務艇『はしだて』への配属
経験もある給養員(料理人)。



メイベル・フォーン

亜神ロウリィとの戦いに敗れ、
神に見捨てられた亜神。
徳島達と行動を共にする。



ヴォー・ド・ヴィ

ティナエ諜報機関
『黒い手』の一員。
プリメーラの船に乗り込む。



オデット・ゼ・ネヴユラ

翼皇種^{アグレイ}の少女。
戦艦オデット号の船守り。
プリメーラの親友。



江田 島五郎
えだしま ごろう

海上自衛隊一等海佐。
情報業務群・特地担当統括官。
生粋の“艦”マニア。

その他の登場人物

エドモンド・チャン 特地碧海で行方不明となったジャーナリスト。
くろかわ まさあ
 黒川 雅也 海上自衛隊の潜水艦『きたしお』の艦長。
くろかわ まり
 黒川 茉莉 二等陸尉。中央病院勤務の看護師。
 アマレット プリメーラ付きのメイド長。
 シェリー・ノーム・テュエリ 伯爵令嬢。菅原家に寄宿している。
すが わら こうじ
 菅原 浩治 日本の外務官僚。
ちが つき ゆり
 望月 紀子 かつて帝国に拉致されていた女性。
 イスラ・デ・ピノス シャムロックの秘書。



シュラ・ノ・アーチ

帆船アーチ号船長。
正義の海賊アーチ族。
プリメーラの親友。



プリメーラ・ルナ・アヴィオン

ティナエ統領の娘。
極度の人見知りだが酒を飲む
と気丈になる『酔姫』。

特地アルヌス周辺



●ロンデル

帝都●

●イタリカ

○アルヌス

碧海

エルベ藩王国

グラス半島

トユマレン

アヴィオン海

碧海



序

特別地域／アヴィオン海／北緯二八度二〇分・東経一四度五八分
 ロンデル標準時一八四四時――

特別アヴィオン海の怪物『鰐鯨』の群れの襲撃により、下腿を失ったオデット・ゼ・ネヴュラは、突如浮上した海上自衛隊特別派遣潜水艦隊所属『きたしお』に収容された。潜水艦の通路は人間一人がなんとか通れる程度の横幅しかない。誰かと行き会った身体を横にしてようやくすれ違えるほどだ。白い翼人の娘を抱きかかえた海上自衛隊二等海曹、徳島甫は叫ぶ。

「通路を空けてくれ！」

「お、おうっ！」

女の子一人抱きかかえていてはなおのこと通りづらい。だが、臍から下を失ったオ



デットの姿を見た乗組員達は、潜航準備で忙しいというのに逃げるようにして道を空けてくれた。さらにゴムシートを敷き詰めた床に点々と落ちた彼女の血液を掃布（ソフ）で拭くことすらしてくれたのだった。

「先生！」

士官食堂は緊急時には手術室となる。全ての支度は連絡が入った段階で衛生員の手で済まされており、医官の湊三等海佐が患者を待っていた。

しかしオデットの姿を診た瞬間、湊三佐は盛大に舌打ちした。

「両下肢のギロチン式切断なんて聞いてないぞ！ しかもこの娘、翼背負ってるじゃないか!？」

「何か問題があるんですか？ 翼皇種だと治療できないとか？」

オデットを治療台に横たわらせた徳島の問いに、湊は答えた。

「骨の作りが微妙に違うんだそうだ。どれどれ……患部の両下肢断端からは頸骨、腓骨が見えて、それを包むように下腿の筋肉、その隙間からは前頸骨動脈、深腓骨神経、頸骨動脈、後頸骨動脈、頸骨神経等々が見える……患部については俺達と全く同じだな。なら、やることも同じでいいってことか。それじゃラインの確保と輸液！ 生食のパックをこっそり持ってこい。それと誰か艦長にこのまま手術すると伝えろ！ 麻酔をする

ぞー！」

その言葉を合図に、医官の助手でもある衛生員が弾かれたように仕事にとりかかった。まず止血に使っていたロープを外して床に捨てるとカフ式ターニケットで脚の血流を抑える。

医官は傍らに突っ立ってオデットの傷口に見入っていた徳島に命じた。

「おい、徳島。ぼやっとしとらんで今の時間をそこの壁に書け！」

「は、はい？」

「ターニケットで止血した時間だ。定期的に血を通わせないと組織が壊死してしまうからそれを防ぐための記録だ。分単位で正確にな！」

「は、はい」

徳島は言われるままにグリスペンを取ると、士官食堂の壁に「止血開始1848」と大書する。慌てて書いたせいか、酷く形の歪んだ字になってしまった。

「徳島、この娘に何があった？ 機械か何かに巻き込まれたのか？ それともサメにでも食いつかれたのか？」

「サメみたいなもんです。海に引きずり込まれるかどうかの瀬戸際で、斬るしか仕方がなくって」

徳島は、重苦しい表情で腰の骨^{クリーパー}に軽く右手をあてる。そして鞘^{さや}の中で包丁がカタカタと音を立てたことのようにやく気付いた。手が震えているのだ。壁に書いた字が歪んだのも、この震えのせいだった。

もちろん理由は分かっている。オデットを二度と歩けない身体にしてしまったからだ。それしか方法がなかったのだから仕方がない。仕方がなかったと自分に言い聞かせてはいるが、骨^{クリーパー}を振り下ろした瞬間のゴリツという骨を断つ感触は嫌でも手に残っていた。そしてその時の彼女の悲鳴も、耳に残って消えない。正しいからといって何も感じない訳ではないのだ。

しかし医官は言い放った。

「よくやった、お前は最善を尽くした！ 後はこつちで何とかしてやる。命だけだな！」

衛生員が生食——生食塩水のパックを抱えられるだけ持つてくると医官は早速手を伸ばした。

「こつちにも生食のパックを一個よこせ」

「は、はい」

医官は衛生員から受け取った生食塩水のパックに、鉗^{はさみ}を突き立てる。そしてオデッ

トの足に浴びせて臍の断端を洗い始めた。

どぼどぼと傷口に生食をかけていくと、どす黒く固まった血で汚れた彼女の患部が洗われ、その下から鮮やかな薄桃色をした肉と白い骨が姿を現す。

徳島は思わず目を背^{そむ}けた。

「くっ……」

職業柄、肉だの骨だのには慣れているはずなのに、それがよく見知った人物のものであると思うと疑似的な痛みに襲われてしまうのだ。

「おい徳島、お前はもういい。科員食堂にでも引っ込んでろ」

医官はアンブルに注射器を刺し、薬剤を吸わせながら言った。

「でも、やったのは俺ですし。何か手伝えることがあるなら……」

「お前、この娘と親しいんだろ？ それじゃ何も出来んよ。ここで役に立つには生きた人間をメスで切って、針で刺して、ヤスリで骨を削って、糸で縫^ぬう……そんな残酷なことを平気な顔でこなせる奴だけだ。この娘を心配する気持ちは理解できる。だが、それは別の時、別の場所であらう。ここから先は俺達に任せておけ。いいな？」

そう言われると否^{いや}も応もない。徳島に出来ることは本当に何も無いのだから。

その間にも、湊医官はオデットを側^{そば}臥位にさせる。そして徳島の存在などもう忘れて

しまったかのように、オデットの背中を丸めさせ腰骨の隙間に刺さるよう麻酔の針を突き立てた。

「あ、後をよろしくお願いします」

返事すらない。

「麻酔完了！ 直ちにオペを開始するぞ」

忙しく立ち働く医官達の様子に後ろ髪を引かれながら、徳島は重い足取りで士官食堂を出たのだった。

徳島は梯子段を降りると科員食堂へ向かった。

見ると短艇から収容されたプリメーラ達がテーブルを囲んでいた。

科員食堂には詰めれば六人座れるテーブルと四人座れるテーブルが、艦首側と艦尾側、二列に並べられている。皆は、その艦尾側——調理室寄りのテーブルに身を寄せて座っていた。

与えられた毛布に身を包み、一言も口を利くことなく静かにしている様子は、まるでお通夜のようなすらあつた。

だがそれも無理のない話だ。自分の乗っていた船が沈没し、海に転落したり、溺死し

かけたりした。その上、鯨鯨の群れに襲われ他の乗組員達が次々と食われていくところを目のあたりにしたのだから。助かった喜びを味わうよりも先に、安心してしまうのも当然だった。

例外なのは、艦首側のテーブルでアクアスの人魚達と話し込んでいる一等海佐江田島五郎、そして徳島自身くらいだろう。だが徳島やその上司の江田島とて、多くの犠牲が出たことに何も感じていない訳ではない。ただ、今は成さなければならないことがあるから、それを優先しているだけなのである。

今、徳島がしなければならないこと。

その一つが救出作戦の目標であった米国籍ジャーナリストの監視だった。そもそも徳島と江田島はこの男の身柄を確保するためにアヴィオン海まで出張ってきたのだ。

華人系米国籍ジャーナリストのエドモンド・チャンは、四人テーブルの調理場側に座り、どこか傍観者めいた余裕の態度で日本の潜水艦の様子を興味深げに見渡している。

セーラー服の上衣をまとった人魚達に強い関心を抱いているらしく、江田島とケミイ達の会話に聞き耳を立てて何度も視線を送っていた。江田島もそれを意識しているのか、何でもなようなことばかりを話題にしている。

次いすべきことは、収容された特地人の状態確認だ。

徳島はプリメーラへ目を向ける。

『碧海の美しき宝珠ティナエ』の統領の娘にして、旧アヴィオン王国王族の末裔たる彼女は、ピンク色の髪をたくし上げると隣のアマレットに上体を預け、市場に並んだ魚のような眼差しを空中に漂わせていた。

衣服が濡れて冷えているせいかな、あるいは繰り返して来た命の危機のせいかな、青みがかった唇を小刻みに震わせている。そして溺者用に用意されたブランデーの入ったカップを両手で抱え、チビチビ舐めるように飲んでいた。

その隣で彼女を支えるアマレットは、プリメーラ付きの主任メイドだ。

主の隣に座り甲斐甲斐しくも乾いたタオルで髪を拭いてあげている。だがそうやって一心不乱に役目を果たそうとしている姿は、自分の役割に没入することで不安や恐怖から目を背けているように見えなくもなかった。

一方、ティナエ海軍所属オデット号艦長のシュラ・ノ・アーチは、プリメーラの正面でテーブルに肘を突きじつと頭を抱えていた。

徳島に背を向けて座っているため表情こそ分らないが、その丸まった背中からは、艦長として指揮を執っていた船と乗組員を失った罪の意識に必死になって耐えている様子が窺えた。

プリメーラの侍従にして、ティナエ共和国の防諜機関『黒い手』の一員でもある少年オー・ド・ヴィイは、チャンと向かい合う席に座っていた。

この得体の知れない潜水艦と称する船と、見慣れない設備に囲まれて神経を昂らせている様子だ。これだけの船をいつの間にティナエ近海まで進出させたのか。それを成し得た日本という国に対する警戒心が掻き立てられているのかもしれない。

「あ、司厨長」

そんなオー・ド・ヴィイが徳島の姿を認めて声を上げた。

『司厨長』とは、沈んだティナエ海軍オデット号における徳島の役職だった。いろいろな事情と経緯と目的により身分を隠して船に乗り込んだ徳島は、やれることをやっていった結果いつの間にかそういうことになっていった。

そしてそれは江田島も同じであった。オデット号の副長となり、若いシュラが艦長の職務を遂行するのを補佐する立場になっていたのだ。

ヴィイの呼びかけに反応して、シュラが反射的に立ち上がる。

「ト、トクシマ司厨長！ オデイは？ まさか……」

その時、徳島のティナエ海軍仕様の船員服はオデットの流した血で真っ赤に染まっていた。

士官食堂で止血帯代わりのロープを解いた際、オデットの傷口から溢れた出血を浴びてしまったのだ。

その鮮烈な赤を見たシュラは、最悪の事態を予想したのか表情を険しくする。

「今、手術中です。医師が診てくれています」

徳島はシュラが安心できるよう、出来る限り笑顔を作ってテーブルに歩み寄った。

「つまり、無事なんだね？」

「はい、医師は任せておくと請け合ってくれました」

シュラはホッと胸を撫で下ろす。

すると今度はプリメーラが念を押すように言った。

「本当に大丈夫なんですね？」

「はい、大丈夫のはずです」

徳島は、プリメーラの強い視線に気圧されたように立ちすくんだ。

ブランドーが効いて、『酔姫』モードに入っているらしい。

この状態になると、親しい相手以外目を見て会話することも出来ないコミュ障娘から、ずけずけと思ったことを遠慮会釈なく口にする強気な姫になるのだ。

「何をへらへらと笑っているのですか？ 貴方のしたことでしょう！」



「は……はい」

罪悪感を強く刺激された徳島は、申し訳なさに項垂れる。

徳島は、断じてプリメーラが言うようにへらへら笑ったのではない。ただ彼女達を安心させたかっただけなのだ。

しかしプリメーラは徳島の表情を不真面目さの表れと受け止めた。徳島を批難する瞳は罪人を必ず罰してやるという陰のある意思で輝いていた。

「もしあの娘に万が一のことがあったら、わたくしは貴方のことを絶対に許しません」

「……っ」

徳島は歯を食いしばる。オデットの骨を断つ感触と、彼女の悲鳴がありありと蘇って身体が震えた。

だがその時、シュラが割って入りプリメーラを叱った。

「プリム！　そういうことは口にするものじゃない。司厨長だって好きでああした訳じゃないんだ。あの場では他に方法がなかった。仕方がなかったんだ」

「でも、あの娘はこれから生涯不自由を背負うのですよ！　もし司厨長がもっと優秀で、他の手立てを思い付いていたら、あの子の未来は台無しにならずに済んだのに」

だがシュラは頭を振った。

「他に方法はなかった！　誰であつても彼女の脚を切り落とすことしか出来なかった。

もしボクがあの場合にいたとしてもそうしていた。だからプリム、君は司厨長を詰るべきではないんだ。逆に感謝すべきなんだよ。あの時、あの瞬間、司厨長が少しでも躊躇っていたらオデットは命を失っていたんだからね」

「でも！　あの子はもう二度と心から笑うことが出来なくなってしまうました！」

「どうしてそう決めつけるのさ？　生きてさえいれば笑うことなんていくらでも出来る」

「どうやって？　どうやってこれから人並みの幸せを手にするればいいんですか？　身体が不自由になってしまったあの娘は、もう船守りとして働き続けることは出来ないでしょう。恋をして誰かの妻になることも難しい。子を生じて育てることだって大きく制限されます。それでどうして屈託なく笑うことが出来るの？　あの子の綺麗な笑顔がもう見られなくなってしまうと思うと、わたくしは、わたくしは……」

プリメーラはそう言うのと、こみ上げてくる悲しみを堪えるように口を手で覆い顔を伏せた。

だがシュラはプリメーラの両肩に手を添えて言い聞かせる。

「君の言いたいことはよく分かるよ。オデットが心配なんだね。けど、それは司厨長の

責任ではないよ、プリム。そこだけは履き違えたらダメなんだ」

「でも、オデイの足に骨裁ち鉈を振り下ろしたのは司厨長なんですよ！」
するとシユラは目をすつと細めた。

「分かった。よく分かった。君がそのつもりなら、ボクもこの際だからはっきり言わせてもらうよ。君が司厨長を詰るのはね、責任転嫁したいからだよ！」

「せ、責任転嫁ですって？」

「そう、君は責任を感じてるんだ。そもそも自分がシーラー侯爵公子を探したいなんて言い出さなければ、こんなことは起きなかったとね！」

「シユ、シユラ、こうなったのはわたくしのせいだとおっしゃるつもりなの？」

「まさか！ ボクがそんなこと思うはずがないよ。そもそも船で起こる全てのことは艦長であるボクの責任なんだからね。だから、オデットの身に起きたことで詰られるなら、ボクであるべきなんだ。けど君自身が、他の誰でもない君こそが、全てを自分のせいだと感じてしまっている。でもその責任は一人ではとても背負いきれるもんじゃない。だから君は、オデイを傷つけた罪だけはせめて誰かに着せたいんだ。司厨長はその誰かにされてしまっただけなんだ！」

「そ、そんなこと……」

「ない、と言い張れるかい？」

「……」

プリメーラはしばしシユラとの間で強い感情を込めた視線をぶつけ合う。だが、程なくして力なく視線を落とした。

「分かってくれたみたいだね？ さあ、司厨長に謝るんだ」

だがプリメーラは頭を振った。

「嫌です。絶対に分かったりしません。謝りません」

そしてこの話題を続けることを拒むように、顔を伏せてしまった。

シユラは、頑なな態度をとるプリメーラを見て深々と嘆息した。そして仕方なさそうに徳島を振り返る。

「すまないね、司厨長。本来はもつと聞き分けのいい娘なんだけど……きつと疲れてるからだと思う。気が動転しているんだ。凄くね。元氣を取り戻せば、この娘だつて君に責任がないことは分かるはずだ。だから悪く思わないであげて欲しい」

シユラに言われて徳島は大きく嘆息した。そして仕方ないことだと肩を竦める。

「大丈夫ですよ。何故姫様がこんな態度をとったのかさえ分かっているらば我慢できますから」

するとシユラは、眼帯を着けていない左の^{まがた}臉を驚いたように瞬かせ、ニヤリと笑った。
「へえ……」

その反応に今度は徳島が驚く。

「何か？」

「いや、君が許す許さないではなく、我慢と口にしたからさ。そうかそういうことなのか。だとするとプリムがこんな態度をとった理由も分からないでもないかな」

「何を言ってるんです、艦長？」

意味が分からない。徳島はシユラの真意を確かめようと問いかけた。

だが答えを得る時間は与えられなかった。艦内に「^{せいかく}潜航！ 潜航！」の号令とそれを復唱する声が行き交ったからだ。

「^{かんきよう}艦橋ハッチ閉鎖！」

「艦橋閉鎖、空気出せ」

発令所で行き交うその号令とともに、密閉された艦内の空気圧が上がっていった。

艦内の気圧上昇は、艦内にいる全員に例外なく襲いかかった。

この気圧変化は人間の鼓膜に異常を生じさせる。

高速で走行する電車が長いトンネルに突入した時、あるいは高層階へ上がる高速エレベーターに乗っている時などに起こる耳の違和感がそれだ。

これは鼓膜^{こまく}を挟んだ体内外の気圧に差が生じ、気圧の低いほうに鼓膜が膨らむことで起こる現象である。この違和感は鼻と喉の奥、解剖学的には咽頭^{いんとう}鼻部^{びぶ}と称する部位の耳管口を開くことで解消されるのだ。

いわゆる『耳抜き』である。潜水員でもある徳島はこれを自在に出来るので無意識に解消していた。

徳島だけではない。潜水艦の乗組員はこうした気圧の変化に対応できることが必須の資質であるため全員が平然とした表情のままであった。

だが、期せずして潜水艦の乗客となったプリメーラやシユラ達は違った。予告なく発生したこの現象に大いに戸惑い、不安に陥る。

顔を伏せていたプリメーラも、耳の違和感に頭を上げた。主の異変を見たアマレットは、皆が同じような体験をしていると理解して声を上げる。

「な、なんか耳が変です！」

「それは艦内の気圧が上がっているからです。唾^{つば}を呑み込むと耳が通って楽になりますよ」

江田島が落ち着き払った口調で説明した。

「唾を？」

「そうです」

アマレットが唇をきゅっと閉じて唾を吞み下そうとする。

プリメーラもシユラも、チャンも揃って同様にしている。

すると程なく解消したようで、皆ホッとした顔つきをしていた。

だがオー・ド・ヴィだけは、いくら唾を吞み込んでも耳が通らないらしい。表情がどんどん険しくなっていく。高くなる空気圧に、耳の苦痛が耐えがたくなってきたようだ。そこで徳島が他の方法を告げた。

「口をパカッと開いてもいい感じで抜けますよ。顎を左右にずらしでもいい」

するとオー・ド・ヴィは必死になって何度も何度も顎をしゃくった。そしてようやく空気が抜けたらしく、ホッとした表情を見せたのだった。

* * *

「とめ！」

発令所の潜航指揮官が、突き出した右の掌をぎゅっと握った。手の合図を添えるのは噴出する空気音に紛れて号令が聞こえない時のためでもある。陸・海・空それぞれの戦闘組織が、独特の符丁、言い回しを用いるのは、爆音轟く戦場で命に関わる聞き間違いを防ぐための工夫なのである。

「とめ」

合図を受け潜航管制員が艦内を縦横に走るパイプについたハンドルを何回も回している。次第に空気の流入音が静まり、やがて止まった。

「空気とめた！」

そしてしばらくしても艦内の空気圧が下がっていない——つまり艦内が完全に密閉された状態である——ことを確認した潜航指揮官は哨戒長に告げた。

「閉鎖よし」

二番潜望鏡にとりついて艦の周囲三六〇度を確認していた哨戒長は、発令所の最後部で椅子に腰を掛けている艦長に告げる。

「艦長、危険な目標は潜望鏡視界内にありません。潜航します」

「了解」

黒川艦長が頷くと哨戒長が令する。

「潜航せよ！」

「ベント開け！」

大量の海水の流れこむ音が艦内に響く。メインタンクに海水が満ちていこうとしているのだ。それによって艦は浮力を少しずつつ失い、海面下に潜り込んでいく。

「深さ一八、ダウン三度」

哨戒長から操舵員に、目標とすべき深度と姿勢角が指示される。

「ダウン三度」

操舵手の木内海士長が復唱して舵を押す。すると『きたしお』が前に傾いていった。

「ダウン三度。入り始めた」

黒い艦体が海面を切り裂いて水面下へと潜り込んでいく。艦首部分から、艦の中段、そして最後にセイル部分が海面下へと没していった。

「ベント閉め」

「ベント閉鎖」

「深さ一八。横舵中央！」

「艦長。ツリムよし」

発令所内で様々な命令と復唱が行き交い、艦体が海面下で安定したことを確認して一

段落する。

黒川は水測員に尋ねた。

「鯨鯨の群れの様子はどうか？」

『先ほどの襲撃で、鯨鯨S八九とS九〇が三一三度の方角に逃げて行きました。その後、遠方で鯨進音がうろついています。びっくりして一目散に逃げていき、一息ついて何が起こったのか冷静に考えている……という感じです』

水測員、松橋二等海曹の返答は相変わらず分かりやすい。

黒川はそれを聞くとくすりと笑った。

「つまり落ちていたら反撃してくるという訳だな。では、今のうちに深深度潜航してしまおう」

黒川が新たな命令を発すると、艦内では慌ただしく準備が進められていった。

「艦長、深深度潜航配置よし」

哨戒長の報告に黒川は頷いた。

「潜航！」

黒川が目指すべき深度と姿勢角を操舵手に告げる。

「深さ四〇〇、ダウン二〇度」

その時、黒川は医官が手術中であることを思い出して、艦の傾く角度を和らげるべきかと考えた。だが、湊医官であればこの程度の傾斜は問題にしないだろうと思ひ切ることにする。

「ダウン二〇！……深さ五〇、六〇、七〇……」

艦体が再び大きく前方に傾き、操舵手が十メートル毎に深度を読み上げていく。

「二一〇、一二三〇……」

乗組員達はあちこちのバーや手すりに掴まり身体を支えていた。二〇度というのは何かに掴まらなくては立っているのが不安になる傾斜なのだ。

船殻の周囲をとりまくメインタンクへ流れこむ水音が、さらに艦内に響き渡る。水圧が増すとタンク内の空気が圧縮されて容積が減るため、浮力が倍々の勢いで減っていく。そして海水の猛烈な圧力を受けた艦体が時折ミシミシと音を立てるのである。

*

*

「今、何が起きてるんだい？」

科員食堂では、シュラが皆を代表して状況の解説を江田島に求めた。

外の見えない船倉の奥深くに連れ込まれたと思ったら突然耳が痛くなり、テーブルにしがみつかなければならないほど船が傾いた。

さらには艦体がミシミシと音まで立て始めたのである。

水がどんどん流れ込んでくる音は、船体が破れて海水が浸入してきているようにも感じられるから鳥肌が立ってしまう。いくらこの船が海に潜れるものだと言われているにもかかわらず地獄に引きずり込まれるような不安と恐怖に駆られてしまうのである。

オデット号が沈んだばかりということもあって、とても樂觀視できる状況ではなかった。

「副長、報告。ボクは何が起きているか知る必要があるんだ。ボクにはみんなを守る義務があるんだからね」

プリメーラ、アマレット、オー・ド・ヴィが不安そうに、そしてチャンが興味深そうに表情で江田島の回答を待った。

シュラの言葉を聞き、自分が彼女を支える部下であったことを思い出した江田島は語り始めた。

「とりあえず現状を申し上げますと、この艦は今、海の奥深くにまで潜ろうとしているのです」

慎重に言葉を選んでいるのが誰にでも分かる口ぶりだった。だが口にした言葉が嘘にならないようにする配慮そのものが不安を生んでしまう。

「深くってどのくらい？」

シユラはさらに問いかけた。

「かなり深く、としか申し上げられませんか」

「また浮かび上がるのですよね？ 大丈夫なんですよね？」

アマレットが我慢しきれないといった表情で確約を求めた。

その時、アマレットの不安げな質問に被せるようにチャンが言った。

「おい、エダジマよ。そもそもこの潜水艦はどれくらい潜れるんだ？」

「実は深さ一万メートルまで行けます」

江田島は間髪を容れずに答えた。

「い、一万だと？」

予想外の数字に目を丸くするチャン。だが江田島は真顔で頷いた。

「まさか、そんな……あり得ない」

「どうしてあり得ないと分かるのですか？ 我が国では、潜水艦がどこまで潜れるかは非常に重要な防秘であり誰にも開示されていないというのに。チャンさん、もしかして

立ち読みサンプル はここまで

誰かから聞いたことがあるのですか？ もしよかつたらその誰かを教えていただけると嬉しいのですが」

江田島の執拗な追及にチャンは言葉を濁した。

「い、いや、取材源の秘匿はジャーナリストの義務だから言えるはずないだろ。それに本当に知らないんだ。知っていたら聞くはずがない」

そこまで口にして、チャンは江田島の真意を理解した。

潜水艦の可潜深度は国家機密なのだから教えられるはずがない。当然、江田島が本当のことを口にするはずもないのだ。

とはいえ江田島の言葉が嘘だとしても、それを嘘だと指摘できるのは真実を知っている場合に限られる。つまり一万という数値がたとえ与太話であつたとしても、一般人はそれをそのまま受け入れるしかないのである。

「しかし物事には常識ってものがある。ロシア製の原潜ですら一〇〇〇メートルが限界だと聞くぞ」

「どうして我が国の潜水艦建造技術がロシアより劣っていると思うのですか？」

「そ、それはそうだが……」

「我が国の極超々高張力鋼NS1100はそれほど凄いのですよ。何しろ国家機密